

## 神話の復習と女性の復讐

### —桐野夏生の『女神記』をフェミニズムから読む—

本発表は、神話における女性の復讐について考察する。桐野夏生の『女神記』（2008年）において、イザナキとイザナミの神話がどのように語り直され、虐待や裏切りの被害者がいかにして自分の声を取り戻していくかを明らかにする。黄泉の国の女神イザナミと『女神記』に登場する語り手であるナミマとの関係を検討し、女性のセクシュアリティや出産をめぐる歴史的な沈黙を批判するとともに修復する読みの可能性を提示する。

桐野夏生の『女神記』は、『古事記』に描かれる創造神話のフェミニスト的な語り直しであると言えるだろう。『古事記』において、イザナミが黄泉の国に閉じ込められた後、物語の焦点はイザナキの子孫、つまり日本の皇族の系譜の起源に移される。一方、桐野の『女神記』はイザナミの来世へ焦点を当てる。イザナミは黄泉の国で、出産の後恋人に殺されたナミマという人間の女性と出会い、二人は同様の痛み、夫や恋人に対する深い恨みを共有し、復讐を企てることにおいて特別な絆を作る。

本発表では、最初にイザナミとイザナキの神話を紹介し、現代女性作家による神話の語り直しの文脈に位置づける。その上で、『女神記』において女性の復讐がどのように表象されているか論じる。とりわけ、女性のセクシュアリティや、母の身体へのアブジェクション、女性と穢れとの関係に着目することを通じて、この作品がどのように新たな、別の可能性を与えるかについて論じる。